

古墳時代の4本支柱竪穴住居と渡来人 —北部九州を事例として—

重藤輝行(佐賀大學)

目次

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| I. はじめに | III. 韓半島からの渡来人と4本支柱竪穴住居 |
| II. 北部九州における4本支柱竪穴住居の
普及の様相 | IV. おわりに |

I. はじめに

日本の先史・古代の建物の展開は、弥生時代の松菊里型住居、古墳時代の総柱倉庫に代表されるように、韓半島からの人の移動、技術・文化の伝播が深く関わってきた。今回の主題となっている方形4本支柱の竪穴住居は、西日本では弥生時代後期(1~2世紀)には存在し、古墳時代前期には前方後円墳や畿内系の土器とともに広域に拡散する。一方、古墳時代中期後半以降はカマドを設置した4本支柱の竪穴住居が一般化する。

ただし、日本の古墳時代中期中頃(5世紀中頃、陶邑編年TK73~TK208平行期)以降に出現、普及したカマドは韓半島に起源があり、その一般化は日本の竪穴住居の構造にも大きな影響を与えたと考えられる。弥生時代後期以降の方形4本支柱の竪穴住居の広がりには畿内・瀬戸内海沿岸からの古墳文化の広がりを背景にしたものと考えられるが、カマド出現・普及の時期には韓半島の四柱式竪穴住居との関連を検討すべきであろう。

ここでは特に西日本、北部九州に焦点をあてて4本支柱の竪穴住居の展開を論ずるとともに、韓半島との関係を論ずることにしたい。なお、本稿での時期区分、実年代は表1による。また、今回の主題として取り上げられる韓半島の定型的な方形4本支柱の竪穴住居を「四柱式住居」と呼ぶ。「四柱式住居」との関連については後述するが、日本の弥

生時代～奈良時代の竪穴住居で床面に主柱穴4基が検出されるものは、暫定的に「4本主柱の竪穴住居」と呼び分けて論ずることにしたい。

II. 北部九州における4本主柱竪穴住居の普及の様相

1. 弥生時代後期～古墳時代中期前半の竪穴住居

石野博信氏(石野1990)、寺井誠氏(寺井1995、寺井2012)、宮本長二郎氏(宮本1996)の研究を参考に、カマドの本格的な出現、普及に先行する時期の竪穴住居の様相を述べると次のようになる。

弥生時代後期の近畿・瀬戸内・山陰地域では円形・隅丸方形・方形・多角形の平面形の竪穴住居が存在する。それらは4本主柱のものが多いが、5本主柱以上のものもある。一方、北部九州では弥生時代後期から弥生時代終末期(3世紀前半)を通じて、長方形で2本主柱のものが主体となっている。ただし、瀬戸内海に面した福岡県東部や大分県北部では4本主柱の竪穴住居が出現、増加し、瀬戸内海沿岸地域との共通性が高くなる。古墳時代前期には、北部九州でも東部から4本主柱の竪穴住居が増加し、それが古墳時代前期後半～中期前半には主体を占めるようになるとされる。その後、古墳時代中期後半以降は、4本主柱のカマド付住居が西日本の広域で主体的な型式として広がる。

これらの様相を確認するために、古墳時代を通じて竪穴住居の変遷を把握できる北部九州の3ヶ所の遺跡(図1)について、検討をすすめることにしたい。

2. 福岡市早良区有田遺跡群

有田遺跡群は博多湾に面する早良平野のほぼ中央部に位置し、古墳時代前半期の対外交流の窓口となった西新町遺跡から3km程、内陸にある。西新町遺跡には及ばないが、古墳時代を通じて韓半島系土器が出土し、渡来人の存在も推測される。集落は弥生時代から継続的に営まれ、古墳時代も遺跡内の各所で竪穴住居跡が検出されている。竪穴住居の代表的な事例を図2に、方形竪穴住居の長軸、短軸の計測値による平面規模を図5に、時期別の属性の集計表を表2に示した。

表2にみるように古墳時代前期は2本主柱の竪穴住居が主体であり、先行研究と合致する。一方、中期前半に4本主柱のものに転換し、中期中頃、後期には主体を占めている。図5の長軸、短軸の計測値にみるように、前期前半、前期後半は長方形の平面プランが主体であるが、中期前半以降は正方形に近いものが多くなる。このような平面プランも主柱数と関連していると考えられる。また、表2に示したように古墳時代前期は10cm程の高さの屋内高床部、ベッド状遺構を設置したものが主体であるが、中期前半以降は基本的にベッド状遺構は見られない。また、中期前半以前は住居跡中央付近の床面を掘りくぼめた地床炉を設置するものが主体であるが、中期中頃以降は壁際に粘土等を積んでカマドを構築するものが一般的になっている。

西新町遺跡は砂丘に立地するため、柱穴、ベッド状遺構の検出が困難で、同様の基準での集計は行っていないが、近接する有田遺跡群では古墳時代前期は弥生時代以来の2本主柱の竪穴住居が継続し、4本主柱の竪穴住居が普及するのは中期前半以降である。また、西新町遺跡では馬韓地域を主体とする韓半島からの渡来人の存在が推測され、前期のカマド付竪穴住居が多数見つかっているが、有田遺跡群では今のところカマドの一般化は中期中頃以降である。これは、武末純一氏も指摘するように、西新町遺跡のカマドが有田遺跡群など周辺の地域には拡散しなかったとことを示唆している(武末2010、重藤2012 a)。ただし、古墳前期の第170次SC01は砥石、鉄滓が出土し、壁際に方形土坑を設置した小鍛冶工房と推測される住居として注意が必要である(図2)。韓半島からの鉄器製作の先進技術を有田遺跡群でもいち早く導入していたと言えるが、2本柱の伝統的な竪穴住居の形態をとる。中期中頃以降の有田遺跡群の4本主柱竪穴住居に設置されるカマドは馬蹄形にカマドの袖が残る場合が多い(図2、古墳後期の第124次SC02、第116次SC01など)。そのなかにあって、竪穴住居の隅に偏って設置される第52次1号竪穴住居跡(図2、古墳後期)は特異である。

3. 福岡県上毛町池ノ口遺跡

池ノ口遺跡は大分県との県境を流れる山国川の下流西岸台地上に位置する集落遺跡で、瀬戸内海に面した地域にある。弥生後期から奈良時代の遺構が検出され、古墳時代の竪穴住居は中期前半を除き、各時期のものがある。その代表的な事例を図3に、平面規模を図6に、時期別の属性の集計表を表3に示した。

表3によると、前期にも4本主柱のものが一定量を占めており、有田遺跡群とは大きく異なる。寺井誠氏が指摘するように、北部九州でも瀬戸内海に面した地域では4本主柱への移行が早かったと言える。したがって、前期には4本主柱と2本主柱が混在するが、図6のグラフで4本主柱のものを太線で示した。これを見ると、前期の4本主柱の竪穴住居は長軸4.5m以上、短軸3.5m以上に限られ、2本主柱など他の主柱型式に比べると大型であることが分かる。大型化の社会的理由はさておき、前期の4本主柱の竪穴住居は規模が大型化する際に屋根、軸組を支えるために必要な構造であったと考えることもできる。

池ノ口遺跡では中期前半の竪穴住居がないが、中期中頃以降になると4本主柱が主体となっている。ベッド状遺構、炉、カマドの動向は有田遺跡群とほぼ同様で、中期中頃以降はカマドを設置するものが一般化する。

なお、池ノ口遺跡では中期中頃～後半にカマド焚口と甕掛け口の軸線と煙道の軸線が直交するような平面L字形のカマドを設置する4本主柱の竪穴住居が検出されている。このような住居形態を日本ではオンドル住居とも呼ぶ場合がある(亀田2005他)。中期後半～後期の日本各地の竪穴住居のカマドの一般的な形態は有田遺跡群の後期にみるようなものであるので、これらの平面L字形カマドは韓半島からの渡来人の存在を示唆するものと指摘されている。

4. 福岡県うきは市塚堂遺跡

有明海に注ぐ筑後川の中流域に位置する古墳時代前期～中期の集落遺跡で、全長80mを超える2基の中期の大型前方後円墳、月岡古墳、塚堂古墳に隣接している。その竪穴住居の代表的な事例を図4に、平面規模を図7に、時期別の属性の集計表を表4に示した。前期は2本主柱と4本主柱が混在するが、中期前半以降には4本主柱が主体を占めるようになる。また、有田遺跡群、池ノ口遺跡と同様に、中期前半以降、ベッド状遺構がなくなり、中期中頃以降、カマド付竪穴住居が主体を占めるようになる。ただし、塚堂遺跡ではカマド付竪穴住居が中期前半に2例ある。厳密に言えば、2例の竪穴住居から出土した土器は中期前半でも新しい段階、次の中期中頃にかなり近い時期である。西新町遺跡等、玄界灘沿岸の韓半島に近い地域に存在する例外的な古墳時代前期のカマド付竪穴住居を除くと、北部九州では中期中頃～後半にカマドの出現、普及が認められるので(重

藤・吉田2012)、塚堂遺跡ではその先駆的な遺跡と評価することができる。

なお、塚堂遺跡の中期中頃～後半の竪穴住居には4本主柱以外に、主柱配置が不明ないしは不定型のものも相当数を占めている(A地区9号住居跡、D地区5・9・13・14号住居跡など)。図7からこれらの主柱配置が不明ないし不定型なものの規模を見ると、長軸5.4m、短軸4.0mを下回るものに限られ、同時期の4本主柱よりは小規模な竪穴住居に対応することが分かる。したがって、中期後半以降、小型の竪穴住居では定型的な主柱配置をとらず、壁立ち、あるいは竪穴外の主柱で屋根を支えた可能性が考えられる。¹⁾

5. 小結

北部九州の場合、古墳前期には4本主柱の竪穴住居が池ノ口遺跡など瀬戸内海沿岸の東部地域に存在する。これらは弥生時代後期に瀬戸内海沿岸地域で増加した4本主柱の構造が拡散したものと考えられる。前期の4本主柱の竪穴住居は、池ノ口遺跡などでやや大型の傾向を示すことが指摘できた。有田遺跡群ではカマド出現に先立つ中期前半に4本主柱に転換し、これらも大型であると指摘できる。

一方、中期前半にはベッド状遺構がほとんど見られなくなり、中期中頃以降になるとカマドの普及が進む。同じ4本主柱であっても中期前半以前の竪穴住居とは構造的にも大きな変化が生じていると考えられる。²⁾ 日本における竪穴住居のカマドの起源は韓半島の三国時代にあると考えられるので、中期後半以降の4本主柱竪穴住居自体にも韓半島の竪穴住居の影響も想定すべきであろう。

ただし、その具体的な証明は難しいので、次章ではカマドの構造、竪穴外排水溝を設置した竪穴住居を検討して、そのような問題への接近を試みたい。

-
- 1) 小田和利氏は古墳時代後期～奈良時代の主柱穴配置の明確でない小型方形住居について、竪穴外の空間も生活空間として利用しながら、竪穴外に柱を設けたものと考えている(小田1994)。
 - 2) 都出比呂志氏(都出1989)は竪穴住居の柱配置、上部構造を検討し、弥生時代の4本主柱の竪穴住居であっても、西日本は主柱配列求心構造、東日本は主柱配列有軸対称構造によるものとし、その差を指摘している。同じ4本主柱でも上部構造まで含めた地域差、展開の検討が今後の課題である。

III. 韓半島からの渡来人と4本支柱竪穴住居

1. 平面L字形カマド

古墳時代前期の西新町遺跡では支柱配置は明確でないが、カマド付竪穴住居の存在が特徴である。西新町遺跡のカマドは、住居隅部に対角線方向に主軸をおいたⅠ類、平面L字形のⅡ類、焚口、掛け口から同一軸線上に竪穴外に排煙する形態のⅢ類に分類されている(図8の1~3)。³⁾

前述のように、西新町遺跡では前期のカマド付竪穴住居があるが、砂丘遺跡のため支柱穴は不明である。この他に北部九州では弥生時代終末~古墳時代前期のカマドの例に福岡市西区大塚遺跡14・15次001竪穴建物、糸島市前原西町遺跡A区1号住居跡の例があるが、前者は2本支柱、後者は支柱配置が不明である。大塚遺跡第14・15次001竪穴建物(森本2010、図9)は、床面中央に同時期には類例の少ない鍛冶遺構が検出されており、韓半島からの渡来人の関与も想定される。

中期中頃~後半にカマドが広く普及する直前の時期である中期前半の例としては、上述した塚堂遺跡の2棟があり、4本支柱が1棟、2本支柱が1棟である。他に、福岡市西区大塚遺跡第14・15次007・008・011号竪穴建物、日田市金田遺跡20号住居跡があるが、大塚遺跡第14・15次011号竪穴建物、金田遺跡20号竪穴建物は4本支柱、大塚遺跡第14・15次007・008号は支柱配置が不明である。このように古墳時代中期前半以前のカマド付竪穴住居では支柱配置の不明な事例が相当数を占める。

西新町遺跡のカマドは直接、周辺には拡散しなかったが、古墳時代中期中頃以降、日本各地に普及するカマドの多くが西新町遺跡のⅢ類と同様のものである(図2の有田遺跡群第124次SC02、有田遺跡群第116次SC01など)。ところが、古墳中期後半~飛鳥時代(7世紀)の北部九州では、西新町遺跡Ⅱ類に相当する平面L字形のカマドが散見される。その分布を示したものが図10であり、その大多数が4本支柱である。

例えば、釣川沿いの宗像地域~遠賀川河口はこのL字形カマドの集中域のひとつと言える(図10の1・2・8)。宗像地域では韓半島系遺物も濃密に出土することから、韓半島

3) Ⅱ類は国立羅州文化財研究所2012中の「구들」に相当し、Ⅲ類は同書中の「부뚜막」に相当すると言える。

の影響のもとで設置された可能性が高い。鳥足文タタキの軟質土器も多いことから、韓半島の中でも馬韓・百濟地域との関連が深いものと考えている(図12、重藤2012b)。筑前地域南部、筑前町では、平面L字形カマドが切杭遺跡(図8の6)などで、数例確認されている。近隣の小郡市干潟城山遺跡は飛鳥時代の大集落遺跡であり、そこで検出された竪穴住居には少数の平面L字形カマドが存在する(図10の18、図7の5)。一方、豊前地域(図9の3～5・11～16)では平面L字形カマドが一定数、存在することから渡来人との関係が想定されており(亀田2005)、上述した上毛町池ノ口遺跡も本地域の例である。この時期、北部九州のみならず日本列島全域で西新町遺跡Ⅲ類と同様の煙道が屈曲せず、焚口、掛け口から同一軸線上に竪穴外に排煙する形態のカマドが一般的であり、それ以外の類型は非常に少ない。一方、同時期の韓半島で平面L字形カマドの類例が数多いため、平面L字形カマドは渡来系要素と解釈されてきた。実際、近畿地方でも韓半島系遺物や大壁建物とともに平面L字形カマドが見つかっており、渡来人との密接な関係は疑う余地がない。

図13は池ノ口遺跡の竪穴住居跡配置で、中期中頃～後半の平面L字形カマドを設置した住居と、それ以外の当該期の竪穴住居を強調して示している。これによると平面L字形カマドを設置した集団は調査区の中央にまとまっており、その周辺に西新町Ⅲ類のような一般的な形態のカマドをもつ竪穴住居が分布する。L字形カマドを設置した韓半島からの渡来人の集団と、一般的なカマドをもつ集団が1集落に共存していたと推測できる。後者の集団にも渡来人が含まれていた可能性は絶無ではないが、L字形カマドをもつ集団とそうでない集団が交流する過程でカマドが集落内に普及したのではないかと考えられる。

2. 竪穴外排水溝付竪穴住居

排水溝付竪穴住居は、三国時代の韓半島南部では蔚山(蔚山校洞里104遺蹟など)や昌寧(昌寧桂城里遺蹟)、巨濟(巨濟鵝洲洞1485番地遺蹟)でも発見されている。⁴⁾しかし、近年では4～5世紀の馬韓地域、特に湖南西岸地域の全北扶安・高敞、全南靈光・咸平・光州

4) 新羅・伽耶地域の排水溝付竪穴建物の分布については、嶺南考古學會編 2009 を参照した。홍보식氏
は昌寧桂城里遺蹟の例は土器の様相も考慮し、湖南西岸地域からの移住集団の住居と考えている。

・羅州・海南等に分布する四柱式住居での検出例が多く(光州山亭洞遺蹟、光州河南洞遺蹟など)、地域的な特徴となっている(홍보식 2013)。

日本における排水溝付竪穴住居は大阪府八尾南遺跡などのように、弥生時代にも存在し、北部九州でも弥生後期、さらには弥生中期に遡る例がある(表1)。北部九州の排水溝付竪穴住居棟数は、弥生時代中期では3遺跡4棟、弥生時代後期9遺跡12棟、古墳前期2遺跡3棟、古墳中期中頃～後半11遺跡33棟、古墳後期28遺跡99棟、飛鳥時代2遺跡4例を数え(図11)、古墳中期中頃以降に急増したと言える。なお、古墳中期中頃以降の事例はほとんどが西新町遺跡Ⅲ類に相当するカマドで、4本主柱である。

古墳中期中頃～後半には福岡市内(高畑遺跡・飯倉F遺跡)と宗像地域～遠賀川河口(古賀市大田町遺跡・宗像市久原瀧ヶ下遺跡・同野坂一町間遺跡・同富地原遺跡群・岡垣町友田遺跡)、豊前地域北部(みやこ町大久保遺跡群)に分布している。また、後期になると、古墳中期後半の分布域から周辺に拡散し、増加したような様子が見えてくる。福岡市飯倉F遺跡・梅林遺跡は馬韓系の土器が副葬された梅林古墳に近く、梅林遺跡では大壁建物(図8の8)も検出されている。⁵⁾ また、宗像市域や古墳後期になって排水溝付竪穴住居の事例が集中する福津市練原遺跡・奴山遺跡群・在自遺跡群(図8の6・7)でも馬韓系土器が多い(図12)。したがって、古墳中期後半以降の増加は、馬韓地域からの渡来人の関与が大きかった可能性が高い。⁶⁾

ただ、古墳中期後半以降の分布(図11の1～26)は、弥生～古墳前期の排水溝付竪穴住居の分布(図11のA～J)とほぼ一致する。岡垣町高丸・友田遺跡群、宮若市中遺跡群のように、同一遺跡で弥生中期～古墳前期と古墳後期の事例が発見される場合もある。排水溝付竪穴住居の採用は排水に特別な対策が必要な丘陵斜面などの遺跡立地が大きな前提になったと考えられる。また、弥生時代には青銅器・鉄器・石器・玉生産を行なう建物に採用されるようでもある。したがって、馬韓系渡来人であっても、集落立地や生産活動によっては竪穴外の排水溝を設置しなかったことも想定される。その一方で、排水溝の有る住居と無い住居の双方が混在する遺跡があり、排水溝付住居に居住した韓半島から

5) 梅林遺跡の排水溝付竪穴建物については、報告書等でオンドルあるいはⅡ類カマドの構造の一部として排水溝を捉える見解が提示されている。ここでは、排水溝とし、排水溝付竪穴建物の類型に含めた。

6) 古墳時代中期中頃以降の排水溝付住居は山口県にも分布する。西日本全域について確認を進め、より総合的に検討することを課題としたい。

の渡来人と、排水溝を持たない竪穴住居に居住した倭人が1集落内で共存した場合もあったのではないかと想定される。

湖南西岸の排水溝付き四柱式住居は4世紀後半～5世紀前半に集中する(홍보식 2013)。北部九州で増加するのは古墳時代中期中頃、すなわち5世紀中頃であり、渡来人の増加の画期と合致し、韓半島での排水溝付竪穴住居の盛行期とかろうじて重なる。ただ、北部九州では古墳時代後期、6世紀にも相当数の排水溝付竪穴住居が存在する。これについては、韓半島からの渡来人集団が一定期間、故地の竪穴住居の構築法を維持していたのではないかと考えられる。⁷⁾ 干潟城山遺跡のような飛鳥時代の平面L字形カマドも同様に解釈できよう。

3. 小結

北部九州における平面L字形カマド、竪穴外排水溝付竪穴住居の急増期は古墳時代中期中頃であり、日本列島主要部におけるカマドの出現時期、さらには古墳時代後半期の定型的な4本支柱の竪穴住居の成立時期と符合する。また、それらを構築した集団を渡来人と考えると、渡来人は在来の倭人と1集落内で居ともに居住する場合があります、そこでの交流を通じて4本支柱のカマド付竪穴住居が広く古墳時代中期中頃以降に拡散したと考えられる。韓半島西南部、湖南地域における四柱式住居は馬韓的な特徴を示す建物で、3世紀前半から4世紀初に形成され、5世紀を通じて盛行したとされる(鄭一2005)。⁸⁾ したがって、四柱式住居の終末に近い頃の一群と日本の4本支柱カマド付住居との関連が想定される。

ところで、中期前半にカマドが存在した塚堂遺跡では、L字形カマド、竪穴外排水溝の例は含まれないが、陶質土器、軟質土器なども存在し、渡来人の存在が想定され

7) なお、湖南地域でも同時期に排水溝付竪穴建物とそうでない住居が存在する。また、湖南地域の羅州雲谷洞遺跡、嶺南地域の蔚山蓮岩・華峰洞遺跡では青銅器時代に遡る排水溝付竪穴建物が検出されている。古墳中期中頃以降に玄界灘、周防灘沿岸を中心に馬韓からの渡来人を背景として増加したと考えたが、古墳前期以前の排水溝付竪穴建物の機能・立地と出現背景、同時期の韓半島との関係解明も今後の課題であろう。

8) 조규택氏(조규택2012)は4世紀初～4世紀中後葉に主体があり、一部、4世紀後葉～5世紀中後葉にまで連続するとしていて、若干の差がある。湖西地域でもほぼ同様の継続時期が指摘されている(신연식 2012)。

る。また、隣接する中期中頃～後半の大型前方後円墳、月岡古墳、塚堂古墳では初期馬具、帯金具などの韓半島から舶載された可能性のある副葬品も豊富であり、両古墳の被葬者が韓半島との交流に大きな役割を果たした首長であったと推測されることとも合致する。一方、有田遺跡でも古墳時代中期には韓半島系軟質土器・陶質土器、軟質土器の製作に使用したと考えられる無文当具なども出土している(図14)。したがって、韓半島からの渡来人の堅穴住居はL字形カマド、堅穴外排水溝に限定されず、抽出は困難であるが、一般的な4本主柱の堅穴住居にも相当数、含まれていると考えられる。

また、塚堂遺跡では図2に示すように中期中頃～後半に4本主柱の堅穴住居の他に、主柱配置が不明確なものも多い。湖南地域では5世紀後半以降、次第に四柱式住居が減少し、非四柱式(無柱式)住居が増加するとされる(이은식 2007)。平面規模が小型ということも理由の一つであろうが、韓半島の方形の非四柱式堅穴住居との関連も検討すべきであろう。

このような脈絡から古墳時代後半期のカマドを設置した定型的な4本主柱の堅穴住居には韓半島との関連が小さくなかったと想定される。本稿ではL字形カマド、堅穴外排水溝という情況証拠の検討にとどまるが、4本主柱の堅穴住居と四柱式住居の平面規模、周壁溝、壁構造等を総合的に検討すれば、より直接的に証明が進むのではないかと考えられる。

IV. おわりに

日本においては弥生時代以来、4本主柱の堅穴住居が存在するが、上述のように韓半島の四柱式住居が大きな影響を与えたとすれば、古墳時代中期中頃以降のことになる。住居構造の様々な属性を考慮した、より詳細な検討が望まれる。また、古墳時代中期中頃は馬韓地域の四柱式住居跡の最終末期に相当するが、3～4世紀の盛行期の四柱式住居が弥生時代終末～古墳時代前期の日本の4本主柱堅穴住居に影響を与えたかどうかも考慮する必要性が感じられる。自身の課題とするとともに、諸賢の御批判をまつことにしたい。

一方、小形で柱配置の不明瞭な堅穴住居や排水溝付堅穴住居の問題を考慮すると、四柱式以外の堅穴住居も含めた日韓両地域での建物の総合的な比較の重要性が認識でき

る。本稿が今回の主題設定の意図に即しているかは心許ないが、今後の日韓の建物構造の関係や日韓交流史の解明につながる部分が少しでもあればと願っている。

紙幅の関係から、発掘調査報告書に関する文献の引用は省略せざるを得なかったが、御寛恕いただければと思う。なお、本稿の第3章は、吉田東明氏と連名で執筆した原稿(重藤・吉田2012)の一部を加筆修正したものである。

また、本稿の作成に際し、次の方々にご教示をいただいた。記して感謝します。

小澤佳憲 亀田修一 武末純一 寺井誠 林潤也 桃崎祐輔 吉田東明 金武重 金想民 李暎澈

引用文献

- 石野博信, 1990, 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館.
- 小田和利, 1994, 「北部九州のカマドについて」, 『文化財学論集』文化財学論集刊行会.
- 亀田修一, 2005, 「地域における渡来人の認定方法—豊前上毛郡地域を例として—」, 『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会資料集.
- 重藤輝行, 2012a, 「九州に形成された馬韓・百濟人の集落—福岡縣西新町遺蹟を中心として—」, 『마한 백제인들의 일본열도 이주와 교류』, 중앙문화재단연구원 학술총서 4, 서경문화사(書景文化社)
- _____, 2012b, 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」, 『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ, 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 重藤輝行・吉田東明, 2012, 「日本列島北部九州地域における馬韓・百濟系竪穴建物の検討」, 국립나주문화재연구소, 『옹관고분사회 주거지』.
- 武末純一, 2010, 「集落からみた渡来人」, 『古文化談叢』第63集.
- 寺井誠, 1995, 『古墳出現前後の竪穴住居の変遷過程—北部九州の事例を基に—』, 『古文化談叢』第34集.
- _____, 2012, 「西日本における竪穴建物の変遷過程—弥生時代後期から古墳時代中期前半を中心に—」, 『日韓集落の研究, 弥生・古墳時代および無文土器—三国時代(最終報告書)』, 日韓集落研究会.
- 都出比呂志, 1989, 『日本農耕社会の成立過程』, 岩波書店.
- 宮本長二郎, 1996, 『日本原始古代の住居建築』, 中央公論美術出版.
- 森本幹彦, 2010, 「今宿五郎江遺跡の成立とその背景—弥生時代後半期の環濠集落とその対外交流の様相—」, 『福岡考古』第22号.
- 국립나주문화재연구소, 2012, 『옹관고분사회 주거지』.
- 신연식, 2012, 『호서지역 마한·백제 주거지 연구』, 『마한 백제인들의 일본열도 이주와 교류』중앙문화재단연구원

학술총서 4, 서경문화사.

이은익, 2007, 「全南地域 3~6世紀住居址研究」, 『湖南考古學報』 26輯.

嶺南考古學會編, 2009, 『嶺南地方原三國·三國時代住居와聚落』 第18回 嶺南考古學會學術發表會資料.

鄭一, 2006, 「全南地域 四柱式住居址의 構造的인 變遷 및 展開過程」, 『韓國上古史學報』 第54号.

조규택, 2012, 「湖南地域 馬韓·百濟住居 構造와 展開」, 『마한 백제인들의 일본열도 이주와 교류』 중앙문화재연구원 학술총서4, 서경문화사.

홍보식, 2013, 「삼국시대의 이주와 생활 유형」, 『韓國考古學報』 第87輯.

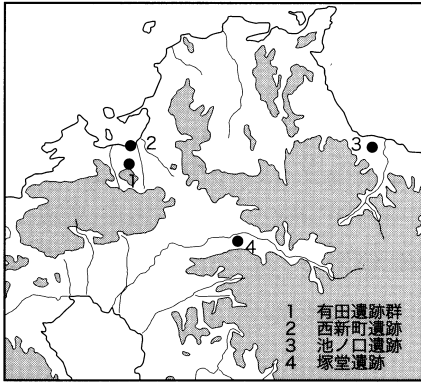


図1 第2章関連遺跡の分布

表1 本稿の編年観と関連遺跡の時期(重藤 2012 aを改変)

年代	時代区分	土器様式名	陶器須恵器編年	初期カマド	平面し字カマド	排水溝付竪穴建物
前 200	弥生	城ノ越式 須玖Ⅰ式 須玖Ⅱ式				大古池間 ● 長久崎保 ● 友高田丸 ●
後 1		後期	高三瀧式 下大隈式 西新式(庄内式)	西新町 ● 大塚 ●		潤地頭給 ● 富地原 ● 中・下 ● 山ノ神 ●
200	古墳	(布留式古段階) (布留式中段階)		西前原 ●		谷 ●
300				前期	前期	
400		中期	(布留式新段階) TG232 TK73 TK216 TK208 TK23 TK47	大肥 ● 金田 ● 池ノ口 ● 琵琶田塔田 ● 墓ノ尾 ● 切杭 ●	飯倉F ● 高畑 ● 蒲田部木原 ● 太田町 ● 奴山 ● 生家・在自 ● 久原瀧ヶ下 ● 富地原 ● 友田 ●	大久保 ●
500	後期	MT15 TK10 MT85 TK43 TK209 TK217	奴山 ● 冥加塚 ● 長田 ●	冥加塚 ● 長田 ●	高畑 ● 杉ノ木 ● 極田 ● 梅林 ●	中 ● 冥加塚 ● 黒田 ●
600	飛鳥			城山 ● 干湯 ●		友高田丸 ●
700						

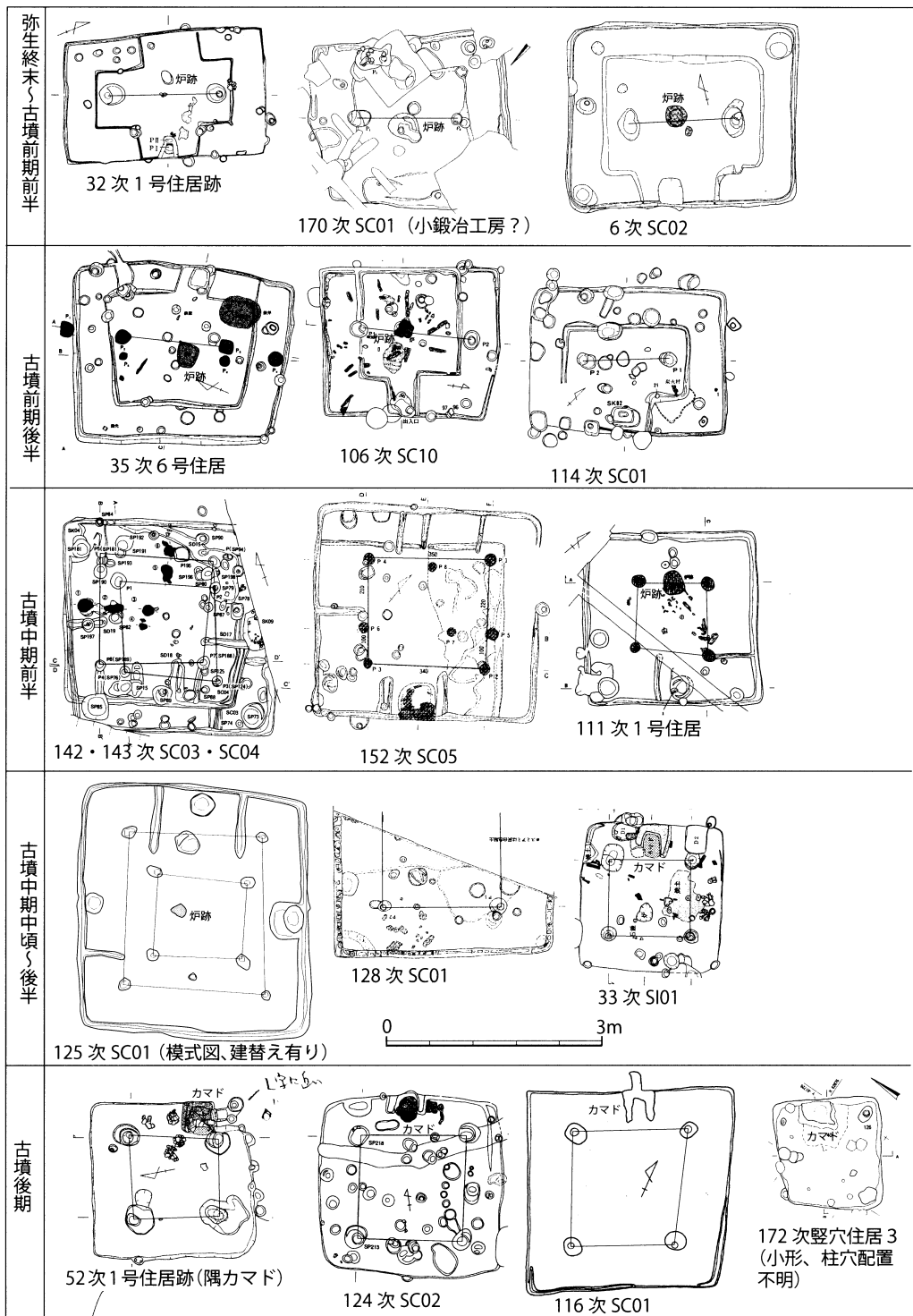


図2 有田遺跡群における竖穴住居跡の変遷 (1/150、各報告書より)

地山を掘って土間の煙道と
事例は全例あり

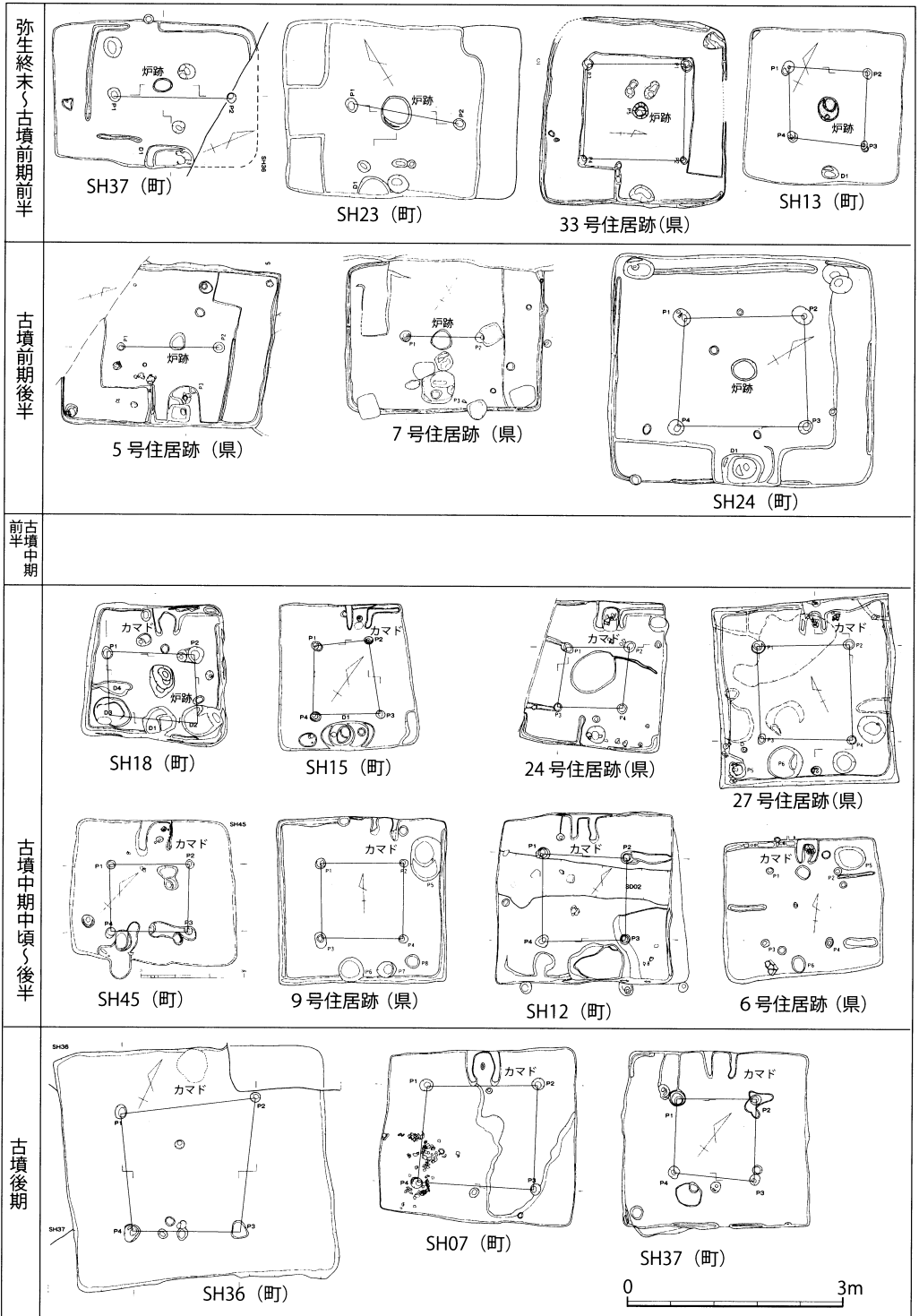


図3 池ノ口遺跡における竪穴住居跡の変遷 (1/150、各報告書より、町は上毛町調査、県は福岡県調査)

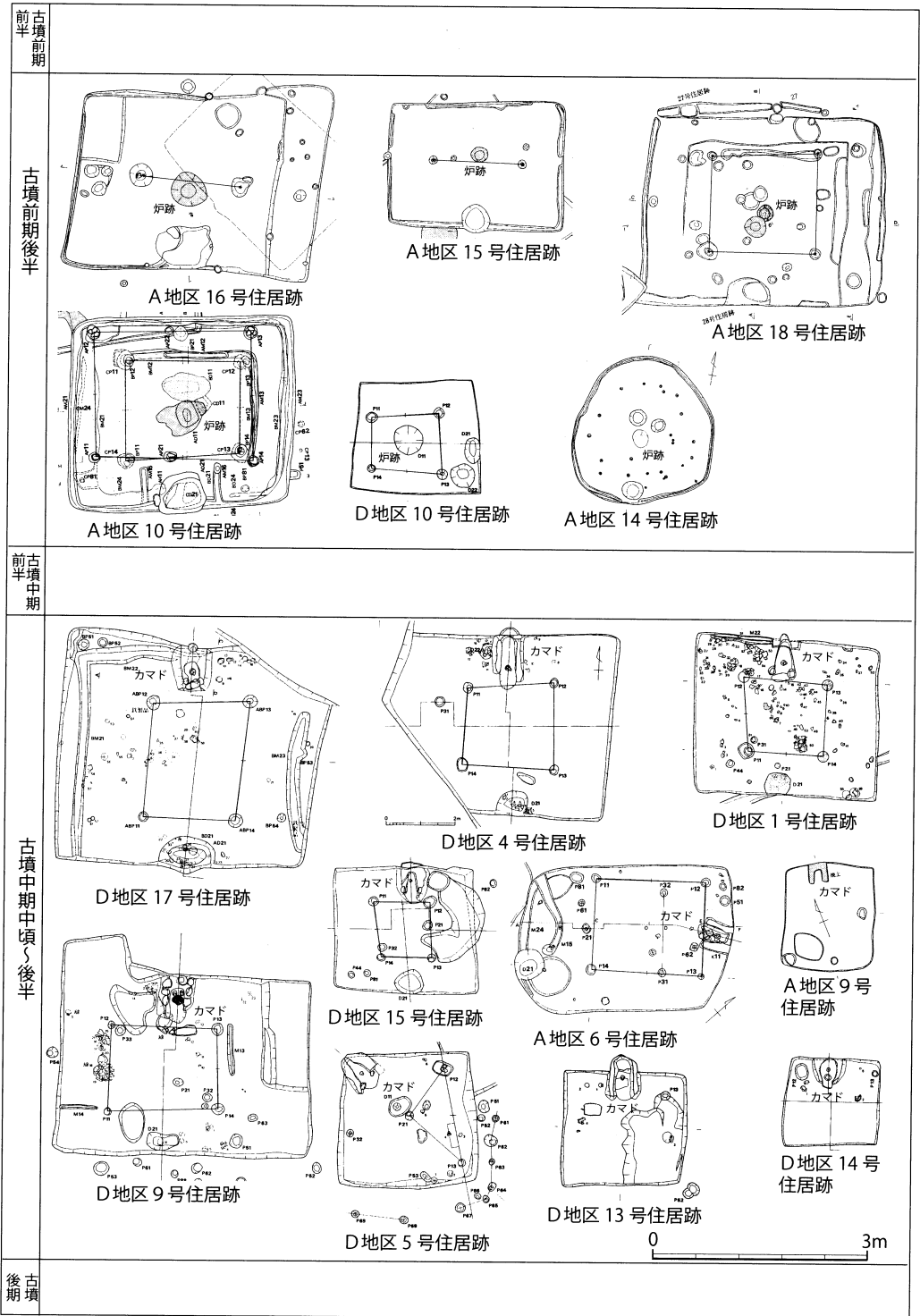


図4 塚堂遺跡における竪穴住居跡の変遷 (1/150、各報告書より)

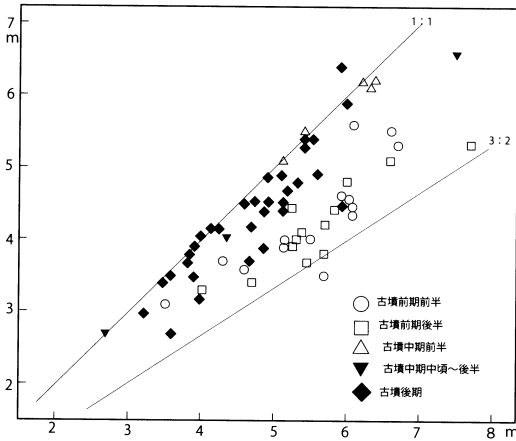


図5 有田遺跡群古墳時代竪穴住居跡の規模散布図

表2 有田遺跡群古墳時代竪穴住居跡時期別集計

	主柱2	主柱4	主柱不明	ベッド有	ベッド無	炉	カマド
前期前半	12		5	14	3	15	
前期後半	12		2	11	1	12	
中期前半		6		1	5	3	
中期中頃～後半		3	1		4		3
後期		38	3		41		32

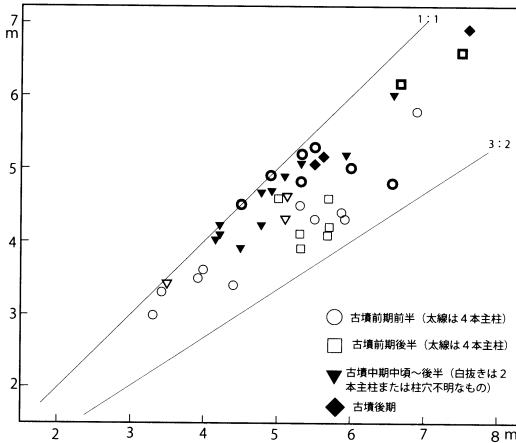


図6 池ノ口遺跡古墳時代竪穴住居跡の規模散布図

表3 池ノ口遺跡古墳時代竪穴住居跡時期別集計

	主柱2	主柱4	主柱不明	ベッド有	ベッド無	炉	カマド
前期前半	11	8	2	14	5	16	
前期後半	6	2		4	3	6	
中期前半	/	/	/	/	/	/	/
中期中頃～後半	2	13	2	2	11	1	10
後期		3			3		3

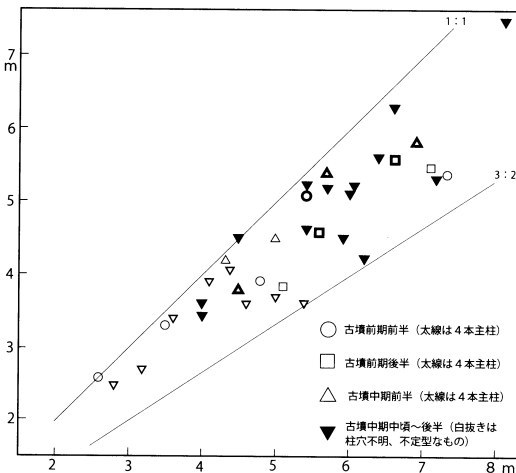
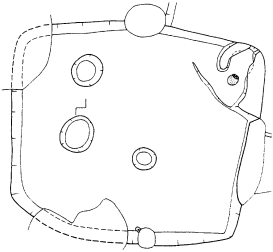


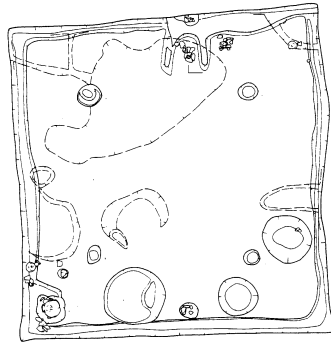
図7 塚堂遺跡古墳時代竪穴住居跡の規模散布図

表4 塚堂遺跡古墳時代竪穴住居跡時期別集計

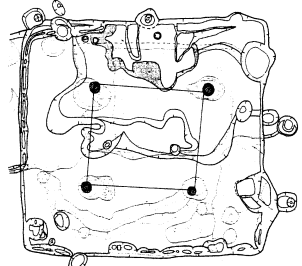
	主柱2	主柱4	主柱不明	ベッド有	ベッド無	炉	カマド
前期前半	2	1	2	1	1	3	
前期後半	1	3	2	2	3	6	
中期前半	1	4	1		6	2	2
中期中頃～後半		14	10	1	21		21
後期	/	/	/	/	/	/	/



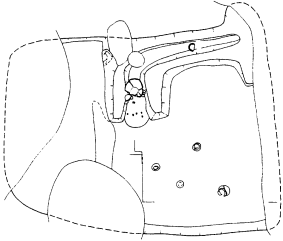
1. 西新町遺跡 (古墳前期、I類カマド)



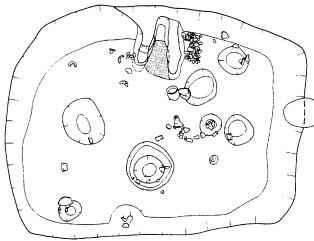
4. 池の口遺跡 (古墳中期中頃、II類カマド)



5. 小郡市干潟城山遺跡 (飛鳥、II類カマド)



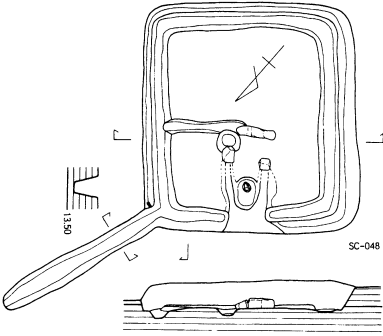
2. 西新町遺跡 (古墳前期、II類カマド)



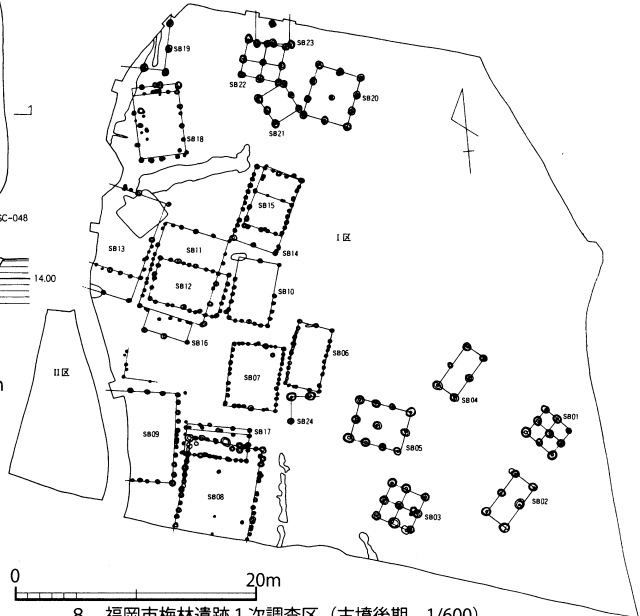
3. 西新町遺跡 (古墳前期、III類カマド)



7. 宗像市冨地原神屋崎遺跡 (古墳中期後半、1/600)



6. 奴山伏原遺跡 SC048 (古墳後期)



8. 福岡市梅林遺跡1次調査区 (古墳後期、1/600)

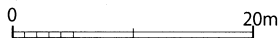
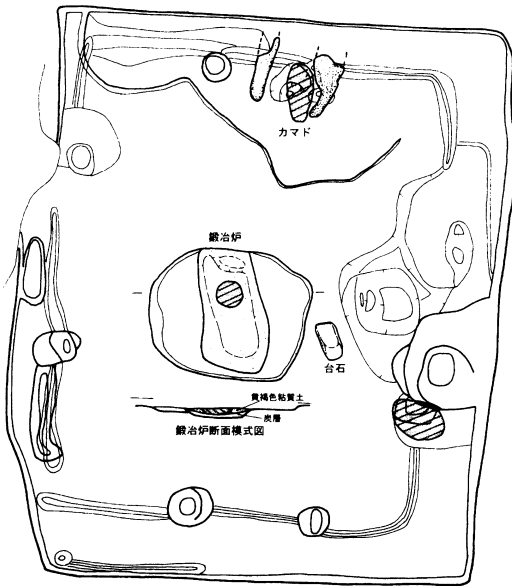
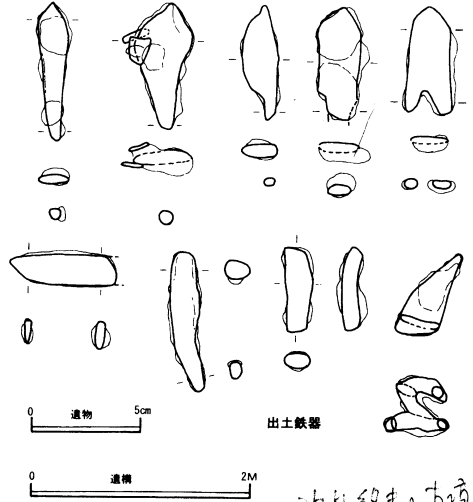


図8 北部九州における初期カマド(1~3)・L字形カマド(4・5)・排水溝付竪穴住居(6・7)・大壁建物(8)
(各報告書より)

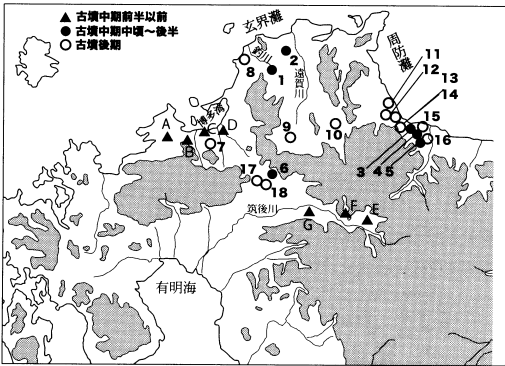


大塚遺跡第14次調査S C01平面図 (建物周囲には直径約12mの外周溝が巡る)

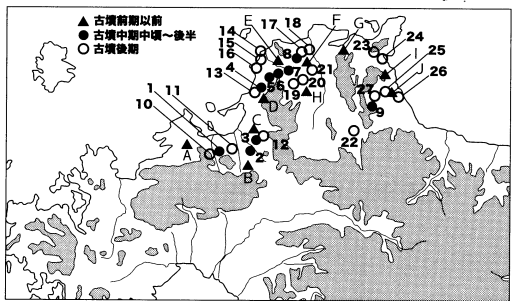
図9 大塚遺跡 14・15次 001 竪穴建物 (森本 2010 より)



治世終末にカマド
カマド内、小鍛冶場
→ 2枚付



- 古墳中期前半以前の初期カマド** A. 前原西町遺跡 B. 大塚遺跡
C. 新西町遺跡 D. 博多遺跡群 E. 日田市金田遺跡 F. 日
田市大肥遺跡 G. うきは市塚堂遺跡
- 古墳中期中頃～後半平面L字形カマド** 1. 宗像市光岡六助遺跡
2. 岡垣町墓ノ尾遺跡群 3. 豊前市塔田琵琶田遺跡 4. 上毛町池
の口遺跡 5. 上毛町安雲ハタガタ遺跡 6. 筑前町切杭遺跡
- 古墳後期～飛鳥時代平面L字形カマド** 7. 福岡市有田遺跡 8. 福
津市奴山伏原遺跡 9. 桂川町影塚東遺跡 10. 川崎町冥加塚
遺跡 11. 築上町上別府園田遺跡 12. 築上町西高塚ナカバル
遺跡 13. 築上町越路貴船遺跡 14. 豊前市永久遺跡 15. 上毛
町長田遺跡 16. 上毛町下唐原伊柳遺跡 17. 小都市力武前畑遺
跡 18. 小都市干潟城山遺跡



- 古墳前期以前** A. 糸島市潤地頭給遺跡 B. 春日市大南遺跡 B 地点
C. 粕屋町古間大池遺跡 D. 古賀市久保長崎遺跡 E. 宗像市富地原岩
野 B 遺跡 F. 岡垣町高丸・友田遺跡群 G. 宮若市中遺跡群・下遺跡
群 H. 北九州市辻田西遺跡 I. 苅田町谷遺跡 J. みやこ町山ノ神
遺跡
- 古墳中期中頃～後半** 1. 福岡市飯倉 F 遺跡 2. 福岡市高畑遺跡
19次 3. 粕屋町蒲田部木原遺跡 4. 古賀市大田町遺跡 5. 宗
像市久原瀧ヶ下遺跡 6. 宗像市野坂一町間遺跡 7. 宗像市富地
原遺跡群 (富地原神屋崎遺跡・富地原森遺跡) 8. 岡垣町友田遺跡
群 2区 9. みやこ町大久保遺跡群 (大久保保神遺跡・大久保原田
遺跡 II 地点)
- 古墳後期** 10. 福岡市吉武遺跡 11. 福岡市梅林遺跡 12. 粕屋
町蒲田部木原遺跡 13. 古賀市極田・杉ノ木遺跡 14. 福津市練原遺
跡 15. 福津市奴山遺跡群 (奴山伏原遺跡・奴山番田遺跡・奴山
大門遺跡) 16. 福津市生家・在自遺跡群 (生家釘ヶ裏遺跡・在自ノ
原遺跡・在自上ノ原遺跡・在自小田遺跡) 17. 岡垣町高丸・友田
遺跡群 18. 岡垣町尾崎・天神遺跡 19. 宮若市中遺跡群 20. 宮若市
咲花遺跡 21. 鞍手町向山遺跡 22. 川崎町冥加塚遺跡 23. 北九
州市上葛原遺跡 24. 北九州市上清水遺跡 25. 行橋市下樺田遺跡
26. みやこ町菅見遺跡 27. みやこ町黒田遺跡群 (黒田平田遺跡・黒
田平原遺跡・黒田蔵ヶ本遺跡)

図 11 北部九州における排水溝付竪穴住居の分布

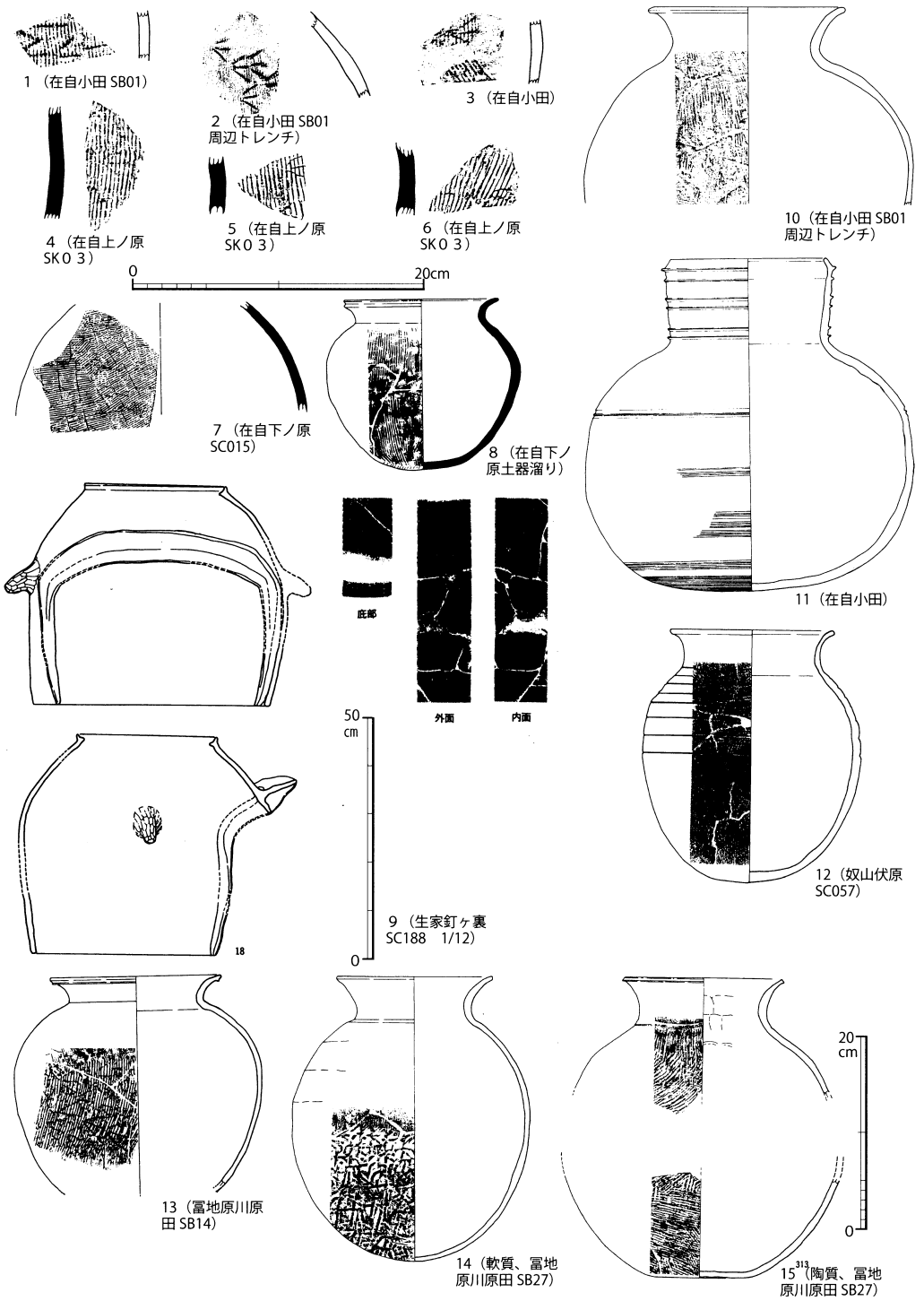


図 12 宗像・津屋崎地域の陶質土器・軟質土器 (重藤 2012 bより転載)

古墳時代の4本主柱竪穴住居と渡来人

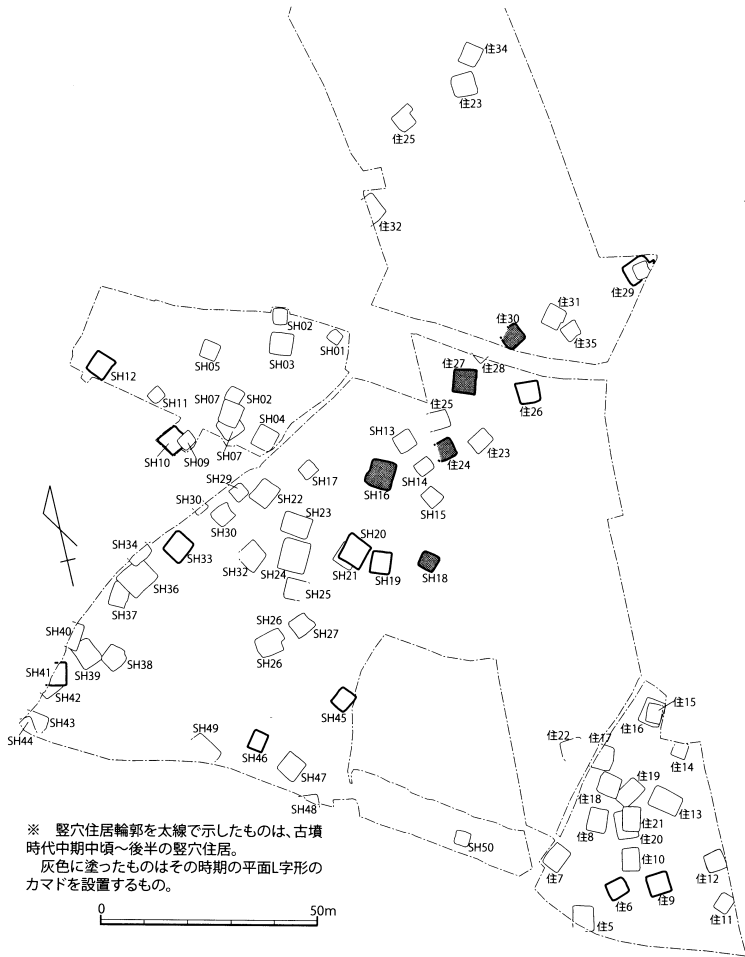


図 13 池ノ口遺跡における竪穴住居跡の分布と平面L字形カマド

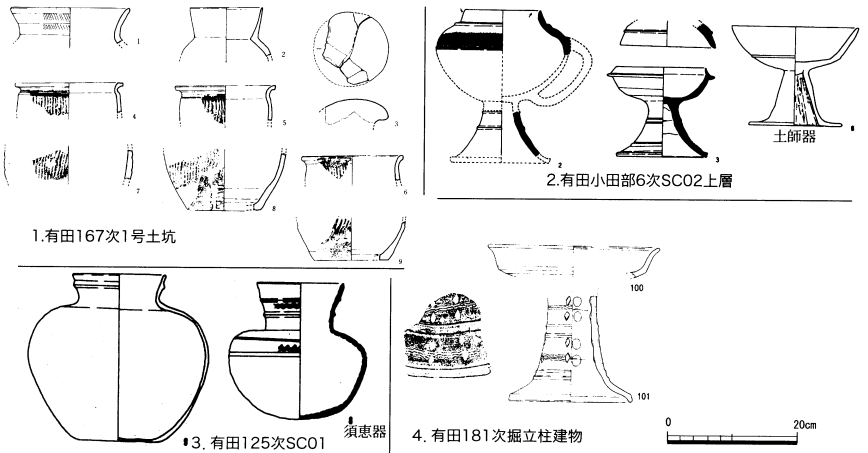


図 14 有田遺跡群出土の古墳時代中期の韓半島系陶質土器・軟質土器等 (1/8)

韓國考古學會

운영위원회

회장	이희준	경북대학교
총무	박광렬	성림문화재연구원
출판	김승옥	전북대학교
기획	이성주	경북대학교
정보	이한상	대전대학교
연구	이준정	서울대학교
	이영철	대한문화재연구원
	하인수	북천박물관
총무 간사	류진아	경북대학교 고고인류학과
출판 간사	오주희	전북대학교 고고문화인류학과

제37회 한국고고학전국대회 발표자료집

2013년 10월 30일 인쇄

2013년 11월 1일 발행

발행 : 한국고고학회

출판 : (주)사회평론아카데미

한국고고학회

780-110 경상북도 경주시 알천남로 298 (재)성림문화재연구원 내 한국고고학회

전화 (054) 741-9737, 전송 (054) 741-9738, <http://www.kras.or.kr> 한국고고학회

The Korean Archaeological Society

Sunglim Culture Property

Alcheonnam-ro 298, Gyeongju-si, Gyeongsangbuk-do, 780-110, Korea

*이 책은 강원고고문화연구원, 강원문화재연구소, 거례문화유산연구원, 경상북도문화재연구원, 고려문화재연구원, 기호문화재연구원, 대동문화재연구원, 동북아지식묘연구소, 동아세아문화재연구원, 백제문화재연구원, 삼한문화재연구원, 서경문화재연구원, 성림문화재연구원, 세종문화재연구원, 영남문화재연구원, 예맥문화재연구원, 울산문화재연구원, 전주문화유산연구원, 중앙문화재연구원, 중원문화재연구원, 충청북도문화재연구원, 한강문화재연구원, 한국고고환경연구소, 한국문화유산연구원, 한국선사문화연구원, 한백문화재연구원, 한빛문화재연구원, 호남문화재연구원의 지원으로 발행되었습니다.

“이 발표논문집은 2013년도 정부재원(교육부)으로 한국연구재단의 지원을 받아 발간되었음”

“This work was supported by the National Reserch Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government.”